

<支部連絡窓口>  
千葉県隊友会館山支部  
事務局(代表)川村 巖



青田を渡る風も快く初夏のさわやかさを感じる時節になりました。恒例の総会行事も滞りなく終え、新年度のスタートという節目にあたり、先月号でも述べましたが、館山支部が現在一つの「岐路」に置かれているとの認識のもと、「今後の支部運営の方向性を見極める1年」として臨む所存ですので、会員諸兄のご理解、ご協力をお願い致します。  
<支部長>

### 支部の活動概要

#### 《4・5月活動実績》

- 4. 7(土) 千葉県護国神社春季例大祭奉仕作業
- 4.19(木) 千葉県隊友会通常総会(千葉市)
- 5.12(土) 支部総会行事(市内芳喜楼)
- 5.16(水) 飛行幹部候補生夜間行軍激励(富浦)
- 5.26(土) 5月支部役員会(コミセン)
- 5.27(日) 旧海軍落下傘部隊慰霊祭(安房神社)

#### 《6・7月活動予定》

- 6&7月 特定NPO 海・河川浄化運動協力(船形小)
- 7月下旬 歴史講話(金澤シイカド、横浜)
- 7.19(木) 県隊友会前期支部長会議(千葉市民会館)
- 7.28(土) 7月支部役員会(コミセン)

### 平成30年度館山支部総会行事を終えて 5月12日(土) 市内芳喜楼

恒例の館空会との合同行事が、市内「芳喜楼」で盛会裡に行われ、昨年からはじめられた両会の総会から懇親会まで同じ会場で行われる円卓方式も、すっかり参加者に馴染んだ感がありました。

**支部総会** 県会長代理の精山英人事務局長臨席のもと、正会員24名が参加して行われ、29年度事業報告、30年度事業計画ほかの議案について、原案どおり参会者の承認が得られました。(下欄に問題点等を要約)

**合同懇親会** 海自第21航空群から小俣(おどら)群司令ほか各隊司令、各隊隊員代表計17名の参加を得て、総勢60余名が集い、群司令、県会長代理の挨拶に続き吉永元館空会会長の乾杯の音頭で開宴、歓談に入りました。

懇親の場は、野田館空会副会長の名司会により終始和やかな雰囲気の中で進められ、すっかり懇親会の定番・風物詩になった各隊ごとの近況プレゼン・自己アピールは、OB会員にとって部隊の実状を理解し、OBと現役隊員相互の意志疎通を深める上で、この集いの趣旨にあったものと言えましょう。  
<支部長>

#### <館山支部運営上の問題点>

- 「29年度事業分析」を踏まえ、「30年度事業計画」の推進に当たった懸案事項
- ※「千葉県との防災協定締結による災害時の協力」、「大規模災害時における自衛隊家族に対する支援」等々、県隊友会の施策、事業活動が広域化、即応化(迅速な対応が要求される)⇒現在の支部の体制・態勢でもって対応が極めて困難な状況にある。

#### 《今年度特に重視すべき事項》

- ※支部運営基盤の整備(充足、充実、強化)
- ・とりわけ、「人(役員)」の充足・会務運営の中核として、(ある程度)専断的に会務の運営に携わり、推進のため奔走できる役員を選任
- ・これが達成できなかった場合  
今後の支部の運営をどうするか「見極め」、その方策について模索が必要

### トピックス

春の叙勲 稲垣 米蔵会員(海)  
危険業務従事者叙勲(防衛功労) 瑞宝双光章受章  
晴れのご受章をお祝い申し上げます。

### レクイエム

4/19熊澤 久助会員(海) ご逝去(享年81歳)  
謹んで哀悼の意を表しご冥福をお祈り致します。合掌  
<支部会員一同>



<注>平砂浦演習場の一角に残っている「用途不明」のコンクリ製構築物。「毒ガス実験棟」というのが通説になっているが・・・館砲校が化兵教育教材として考案作製した部隊用の「集団防毒施設」このほうが論理的ではなからうか？  
(筆者コメント)

### 総会議決権の行使について

平成30年度隊友会定時総会(6月19日)の各議案(5.15隊友掲載)について、代理人(千葉県隊友会会長)に一任する場合は、「議決権の代理行使書(ハガキ)」を6月5日までに投函して下さい。  
<支部事務局>

### 故寺田 友明兄を偲ぶ

<お断り>小さいフォントと「である」体の記述、ご容赦のほどを。

1月末に88歳で逝去された寺田友明兄との出会いは、平成16年に私が隊友会支部長になって以来のことであった。会員として頼りがいのある相談・協力相手であり、また人生の先達として公私にわたって助けられ、教わるが多かった。沼の大寺「総持院」の三男坊として生れ、結婚して分家後は普通の一市民として、また自衛隊員(事務官)の道を歩むことになった寺田兄の人生、ここでは主として波乱に満ちた少年・青春期について念いをめぐらすことにしたい。

**安房中時代の思い出** 戦争初期の昭和17年、13歳のとき安房中(現安房高)に入校、グライダー部(当時は「滑空部」)に籍を置いた。

校庭での練習は地上5~6mを数秒間滑空する程度のものであったが、操縦感覚・技量を養う上で欠かせない経験であった。昭和19年9月に九十九里浜で行われた県主催の「青少年戦時特別滑空訓練会」に挑戦し、一か月間の所定の科目をクリアして「修了証書」を授けられた。半野紙に毛筆書きの質素な修了証書であったが、取得した「3級滑空士資格」とともに寺田兄にとってかけがえのない「宝物」であった。帰校すると4・5年の上級生は各地の軍需工場に勤労動員されており、以後の練習は3年生が主役を務め部員をけん引した。暮に朝日新聞社から寄贈されたグライダーの命名式が北条海岸で行われ、模範展示を3年生の寺田兄が務めることになった。初めて乗る「初級ソアラー」はそれまでの骨組式とは異なり、見るからに「新鋭機」であった。「見学に動員された」安房高女の生徒や市内の小学校児童らがかたずを呑んで見守る中、下級生に曳かれた機体は見事に浮上し滑空飛行に入った。ところが横風のせいから突如、操縦が思うようにいかなくなり、機首を安房高女の一団に向けたまますすべもなく着陸姿勢に入った。女生徒らが悲鳴をあげ蜘蛛の子を散らすように松林に逃げ込んだことは言うまでもない。どうにか安着し事無きを得たが自分で何をやったのか全然覚えがなかった。

昭和20年、4年生になるや勤労動員で第二海軍工廠の君津八重原工場に集団移住した。ところが1か月後、学校から「グライダー一部員は訓練に復帰せよ」との帰校命令が届いた。国策の後押しがあったが、竣工したばかりの館山航空隊の応急滑走路(館山自動車教習所付近)が訓練場に当てがわれ、傍らの洲ノ埼航空隊が機体(グライダー)の貸与から格納、修理の支援をしてくれるなどの厚遇ぶりだったという。

敗戦により翼をもぎ取られた日本であったが、航空の再開により寺田兄のグライダー熱が再燃しとどまるどころを知らなかった。紙面の関係で戦後のことは割愛するが、「グライダーに燃えた青春」、「トビに学ぶ」、「青春の宝物(47分の滑空記録ほか)」など短いフレーズに、寺田兄の少年・青春時代の情熱・思いが凝縮されていることであろう。

**海自事務官時代と定年後の人生** 昭和30年12月、寺田兄は館山航空基地が募集した部隊職員第1期生として、約20名の事務官等

とともに入隊した。管理隊の管財係を務めていた頃、猿山タカン局舎や大賀官舎建設用地の取得に際して、地元有力者等の知己が多いことが買われ地主との折衝の主役を務めることになった。勤務の中での一大事業であり、それなりに達成感も大きかったと述懐していた。

平成2年に定年を迎え、悠々自適の人生とともに、入会した隊友会館山支部では、総会行事や講演会、各種の催しに度々、ご夫妻で参加する姿が見られ、憲法署名活動に奔走したり、「支部だより」にも数回、寄稿してもらった。支部長として頭の下がる思いであった。

6年ほど前、大腸ガンが発見され、摘出手術を受けて以降、週3回、人工透析を受けることが日課になったが、日常生活面では奥様とともども努めて「平静を装う」とともに「明るく、楽しく生きよう」というプラス志向の気概がひしひしと伝わってきた。

お通夜・告別式には、京都智積院で真言宗智山派のトップ(「管長」)として任期を終えて帰館された百歳を迎えるお兄さん(長男)の姿が見られ、そのご子息(総持院住職)が導師を務めた。そこには儀式を超えた兄弟の慈愛が満ちあふれていた。

故寺田友明兄の安らかな旅立ち ご冥福をお祈りいたします。合掌。  
<川村 巖会員(海)>

### 「館山砲術学校と化学兵器」・・・風評被害?を検証する

シリアのアサド政権による化学兵器(毒ガス)の使用が大変気になったのでウィキペディア(Wikipedia)を開いてみた。調べうちに意外な記事が目についた。「海軍で唯一、細菌や毒ガスなどの化学兵器の研究開発と教育訓練を行っていた館山海軍砲術学校」「平砂浦海岸では極秘裏に細菌の散布訓練が繰り返されていた」等々。

日中戦争で日本(陸軍)が化学兵器(毒ガス)を使用したことは遍(あまね)く知られ、戦後、(その事実関係はともかく)多くの歴史研究者などの著書等が出版・公開されており、中国に残された毒ガス弾などの遺棄化学兵器の処理が今でも続けられている。

一方で、海軍の毒ガスについてはあまり聞かれないが、冒頭のウィキペディアの館山砲術学校(「館砲校」)の話は本当なのだろうか。お膝元のことであり、このまま聞き捨てでは治まらない。

**海軍の化学兵器研究開発の元祖** 陸軍に遅れをとらじと海軍も化学兵器の研究開発には相当力を注いでいた。昭和5年に海軍技術研究本部に化学研究部(平塚出張所)が新編され、「毒ガス」の研究開発に着手した。昭和18年、化学研究部を母体に、相模川を羽さんだ広大な敷地(寒川)に相模海軍工廠が建設され、防毒面など防毒用器材の本格的な生産を開始した。終戦まで部隊に大量の防毒用器材の供給が続けたが戦後、米軍に報告した資料に「毒ガス弾」が含まれていることから、工廠では攻撃用化学兵器の製造が行なわれていたことも確かである。しかし、化学兵器の実戦での使用に関しては、昭和20年に作戦部に新編された「化兵戦部」の作戦指導方針メモに「毒ガス攻撃に対する防護に徹する」ことが謳われており、海軍の「実戦での毒ガス使用は無かった」と考えるのが順当であろう。

**館砲校の化兵教育を検証する** 昭和18年、館砲校にそれまでの対空科、陸戦科に加えて「化兵科」が新設された。想定される「対化兵戦」、すなわち「毒ガス攻撃に対する防護」が焦眉の急務とされた。改訂された館砲校の「教育綱領(教育カリキュラムみたいなもの)」には、「化学兵器の研究実験」や「細菌兵器」など一行の記述もない。また館砲校が編纂した「対化兵戦教範」ほかの教育資料にも、「毒ガスの防護」が教育の基本理念として貫かれている。「平砂浦海岸での細菌散布訓練」・・・これは化兵科を出た某予備学生が戦後、匿名で雑誌社に投稿したものがきっかけになったものである。細菌に「潜伏期間がある」ことは中学生でも知っている。上陸した米軍が波打ち際にバタバタ倒れてくれると思っていたのだろうか。スクープにしてはシナリオが幼稚過ぎるし、記者も雑誌社もこれに気が付かなかったのだろうか、不思議でならない。

**むすび** ウィキペディアは英国の非営利団体が運営する「インターネット百科事典」として、誰でも無料で自由に編集でき、かつ手軽に利用できる点で世界中で人気を博している。ただ、専門家による査読や校閲がないため、情報の「信頼性、信ぴょう性、公正性」の保証がないことを知っておくことも大切だと思う。  
<自称地域史探索マニア その20>